論文

JAITS

翻訳メモリ使用時の既存訳が新規訳に及ぼす影響

—干渉と翻訳の普遍的特性の観点から—

山田　優
（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）

Translated text or so-called 'translationese' (Toury, 1980, 1995) contains 'alien' linguistic elements that are less frequently observed in the non-translated target text, because in the course of translation process, both interference from the source text and translation universals (i.e. explicitation, etc) are involved. The influence acted upon the translationese is studied in relation to the source text (ST) and the non-translated target text (NT) (Chesterman, 2004). However, there is an additional element that affects translation; that is, translated text itself (TT). Especially when a Translation Memory tool is used, the influence from TT to TT is maximized. In this regard, issues with a translation memory including 'sentence salad effect' and 'peephole translation' are captured as a result of TT-to-TT influence or 'interference'.

1. はじめに

一般にA言語・文化を、B言語・文化に翻訳すると、その結果として、AでもBでもないCができていく(柳父, 2004, p.166)。翻訳の言語はSL(起点言語)ともオリジナルのTL(目標言語)とも違い、他の言語と接触する時に生じる特徴を含んでおり、翻訳研究分野では「第三のコード(the third code)」(Frawley, 1984)や「翻訳語(translationese)」(Toury, 1980, 1995)といわれる。翻訳(語)の特徴は、主に翻訳コーパスを用い、翻訳されたテクストと翻訳でない目標言語のテクストとの比較により少しずつ明らかになってきている。

翻訳されたテクストと翻訳でない目標言語のテクストの区別が問題にされることもある(Baker, 2007, p.12)。翻訳語は目標言語の影響もしくは干渉を受けて変容し、一方で翻訳でないオリジナル・テクストも、翻訳語から影響を受けるからだ。文学等では、翻訳されたテクストと目標言語で最初から書かれたテクストとの違いをある程度区別できるかもしれないので、問題とされないかもしれない。しかし、近年の実務翻訳、とりわけローカリゼーションの分野で使用される翻訳メモリのような翻訳支援技術を用いた状況では事情が変

YAMADA Masaru, "The influence of existing translation on newly translated segments with the use of a translation memory system: Examined in terms of Interference and Translation Universals." *Interpreting and Translation Studies*, No.8, 2008. pages 191-207.

わってくる。訳文の「再利用」を基底にした翻訳メモリを使用して行う翻訳では、データベースに登録されている既存訳と新規で翻訳される訳語とが影響し合うので、普通の翻訳では見られない特有の現象が起きる。この場合の訳文は、起点テクストと目標言語で書かれたオリジナルのテクストに加え、翻訳されたテクストからの影響が大きくなるのである。

本稿では、翻訳語(以降、translationese)に含まれる特徴を記述する基本的概念である翻訳の普遍的特性(translation universals) (Baker, 1993)、標準化進行の法則(law of growing standardization)と干渉の法則(law of interference) (Toury, 1995)を再考し、それらの概念を用いて、翻訳メモリを使用した翻訳の問題点の記述と説明への応用を試みる。翻訳メモリを使う環境では既存訳が新規翻訳に影響を及ぼす状況が最大化するので、この状況を既存訳経由でもたらされる干渉と捉えることで、一般的に言われているツールの弱点を説明することができる。また翻訳メモリ自体の特異性とその翻訳（者）への影響についても同時に考察を行なう。

2. Translationese とは

翻訳には、目標言語で最初から組み立てられた言葉には滅多に見られない言語的形式や構造が含まれる(Toury, 1995, p. 208)。Translationese には、このような「alien」な現象や特徴が含まれている。これがもし翻訳全般に観察されるならば、特定の目標文化に存在する翻訳者を取り巻くマクロ・コンテクスト的制約とその訳出物との関係を記述する鍵となる。

古くから日本では translationese の特徴を、直訳か意訳かという二項対立で理解してきた。前者を「翻訳調」、後者を「保守化」とも換言できる。翻訳調とは、原文の構文や単語・熟語の一対一対応を追求する翻訳で(山岡, 2000)、素人の翻訳者にとどまらず、プロの翻訳にも観察されてきた。これに対し保守化とは、翻訳の詳細なレベルにおいて、訳語や表現が（目標文化の規範や規則に従って）一般化され、起点言語の原文と比べて語彙的なバリエーション等を失う現象のことである。例えば、最近の広告等に翻訳に見られる「自然」という日本語の訳語は、ST である英語の nature、wilderness、scene 等に対応しているにも関わらず、翻訳されるとその多様性を失い（簡素化もしくは目標言語の慣習に従い）「自然」という一語に集約してしまうケース等が挙げられる（中村, 2007 参照)。このように、translationese に含まれる alien 的現象とは、「翻訳調」と「保守化」の 2 つがあることが分かる。

この対立は、翻訳研究では、literal vs. free、形式等価 vs.動的等価(Nida, 1964)、foreignization vs. domestication (Venuti, 1995)としても議論されてきたが、いずれも翻訳の方略としての意味合いの強い規定的理論であったのに対し、Toury (1995)以降、翻訳の特徴の傾向は、DTS(記述的翻訳研究=descriptive translational studies)の対象として記述され、実務翻訳やその分野で時代とともに変容する目標言語内の翻訳規範(translational norms)と密接に関連して変容するものとして捉えられるようになった。DTS によりボトムアップ的に構築される翻訳規範の導入によって、研究の基軸が規定的研究から記述研究へと転換したのである。また翻訳規範は prescription と description の狭間を埋めるべく架け橋にもなった。翻訳は、翻訳規範に支配された行為であり、実務者にとって、規範は規則と同じくらい規定的な力

をもつものなのである (Baker, 1998)。

さらに制度化・慣習化された翻訳者の翻訳物(product)を、そのコーパスの数を上げて調査することにより、翻訳の法則(law of translation)や普遍的特性(translation universals)が考察されうる可能性が示唆された。これは DTS が translationese を社会・マクロコンテクスト的産物の実体として考え、その細部に見られるミクロ的特徴との関係をも研究対象に含めることを可能にした。

3. Toury の法則

Toury (1995)は、マクロ的視点から、translationese に含まれる特徴に関して、2 つの潜在的仮説を提案している。「標準化進行の法則(law of growing standardization)」と「干渉の法則(law of interference)」である。標準化進行の法則とは、ST との関係で得られる翻訳テクストの特徴が、TT(目標テクスト target text=translated text)で、その目標文化の慣習やすでに馴染みのある言い回しに従って失われてしまう現象である。逆に干渉の法則は、ST の語彙や統語構造を TT に持ち込む傾向である。その移転(transfer)が TT で問題なく受け入れられるならば「positive transfer」となり、そうではなく有標パターンとしてマークされれば「negative transfer」となる。つまり、形式的等価(formal equivalence)の翻訳が TT で受容されれば positive interference であり、翻訳調すぎるとして受け入れられないとすれば negative interference になる。

このように先の「保守化」と「翻訳調」の対立は、Toury の標準化進行の法則と干渉の法則の図式で理解することが出来きる。しかし、ひとつの翻訳に TT の慣習に保守的になりつつも、翻訳調にもなるという傾向が見られるというのは、ある意味では、相反することになる。この点を DTS では社会的条件と結び付けて説明している。

翻訳とは、様々な要因が絡み合っているコミュニケーション現象であり、特に二つの言語に関する出来事であるだけでなく、二つの文化や社会的要因が翻訳に影響する。DTS では特に、受容文化側の社会的条件に焦点が当てられている。つまり、ある翻訳に規則性Xが見出されるのは、目標文化に社会的条件Yが存在する場合であると捉える。Toury の法則は、Even-Zohar (1978/1990)の文学の多元的システム(literary polysystem)との相関性を考慮しており、以下のようなマクロ・文化的な一般性法則性に言及している。

A) （TT 文化において）、翻訳のステイタスが周辺的なポジションにあれば、翻訳は中心にある規範（文学もしくは文体）に依拠する (Toury, 1995, p. 271)。
B) 受容文化(TC)が小さいほど、異国言語要素を受け入れる許容度は大きくなる (ibid. p. 278)。

上記の条件 A と B の条件と連動して、標準化進行と干渉の法則が考察されることが示されている。社会文化的条件 A が適用されると標準化進行の法則の傾向が強くなる。条件 B が適用されると、干渉がより許容されるようになる。具体例を挙げれば、日本の明治時期の翻訳において、日本国内の文学規範は空洞化していたといわれ、当時の翻訳は、文学シ

ステムで中心的ポジションにあった(水野, 2007)。また、欧米・欧州諸国から学問等を輸入し受け入れる風潮が絶大の時期で、人々は心理的に自国文化を「小さく」見ていたといえる。上記の条件 A で言うと、明治期において、翻訳（の文体規範）は周辺的ポジションではなく中心的だったので、A の条件内容とは逆の状況にあった。翻訳に影響を及ぼすような文学規範(既存文体やカノン)は皆無であり、翻訳における標準化の傾向はほとんど見られなかったといってよい。むしろ、翻訳（文体）自体が、文学システム自体の規範を構築する過程にあったであろう（ibid）。条件 B に言及すると、受容文化、つまり日本の文化が小さかった（と認識されていた）ということで、B の条件内容と一致し、欧州・欧米の言語的要素を受け入れる許容度は高く、干渉の法則が最大化されていたと考えられるのだ。このように、Toury の 2 つの法則は、文化社会的条件との関係によって、蓋然性に基づくマクロ的説明がなされている。

無論、2 つの条件と 2 つの法則だけで、すべての翻訳の傾向を説明できるものではないだろう。Toury 自身も翻訳に影響を及ぼす変数はいくつもあり、翻訳者が男性か女性か、年配かそうでないか、素人か経験豊富かといった側面との関係があることも研究の対象としている(2004)。Pym(2008)は、Toury の 2 つの法則を翻訳者のよりミクロ的状況—翻訳者のリスク回避—と関係付けている。翻訳者がプロとして妥当な仕事をして信頼を維持するためのリスク回避の方略として、標準化と干渉があるという。20 世紀後半以降の翻訳規範では目標文化内において、翻訳は周辺的であり、同時に翻訳者も周縁化している。また翻訳メモリ等の技術に特にみられるように、翻訳者の目の前に提示された既存の翻訳（世に一度公開されて一般に受け入れられた文章規範）に従うことが求められているということは、翻訳者自らが責任回避(仮に、メモリ内に納得のいかない訳文があったとしても受け入れることで責任回避するような)を標準化によって行なっているというものである(Bowker, 2005 参照)。Pym は、翻訳者がむやみに干渉の方略を取って（クライアントに対し）挑戦的な仕事をすることは、実際の実務では時間的な余裕もなく、自己リスクも高く、それに見合った報酬システムも整備されていないのが実情ではないかと主張する(Pym, 2008)。この分析と主張の当否は別としても、2 つの法則を翻訳者に近いミクロ的社会視座と関連付けて考察する可能性を提示しているという意味では意義ある指摘である。

4. 翻訳の普遍的特性(Translation universals)

DTS では翻訳のコーパス研究により法則性を考察することを提案しているように、翻訳のコーパス研究も盛んに行なわれている。翻訳の普遍的特性は、コーパスに基づき翻訳されたテクストに典型的に見られる言語的特徴で、特定の言語ペアに影響されないと考えられている(Baker, 1993, p. 243)。主に ST と TT との比較分析によって考察される特徴で、類型的に以下のような特徴が挙げられる。Toury の法則との違いを考えるために、まず以下に詳細を記す。

- 明示化(explicitation)
  暗示的に残さずにはっきりと明記(spell things out)する傾向(Baker, 1993, p. 180)。例

えば、英語の間接話法の *that* が翻訳では明記される等で、結果として、通常、翻訳文は原文よりも 10%程度長くなる傾向にも現れる(ibid, pp. 180-181)。

- 簡素化(simplification)
  翻訳で簡略化(simplify)した言葉が用いられる傾向。非定形構文(infinite structure)の代わりに定形構文(finite structure)が好まれる。曖昧さが解消される。一般的でない句読点の用法が取り除かれる(Malmkjær, 1997)、語彙密度(lexical density)が低くなり、TTR(Type/Token Ratio)も下がる。事象によっては明示化と重なる部分も多い。

- 正常化/保守化(normalization/conservatism)
  目標言語の特徴を誇張し典型パターンに依拠する傾向。句読点の正常化(Malmkjær ,1997; Vanderauwera, 1985)、不完全な文を完全な文章に書き直し、非文法的文章構造を回避する等がこれに該当する。

- 平準化(leveling out)
  翻訳されたテクスト同士が似る傾向。例えば、英語の翻訳コーパスで個別のテクストが、語彙密度、TTR、文章の長さにおいて、原文の結果よりも類似する

個々の特徴に関して様々な研究がされており、明示化については、Blum-Kulka(1986)が、結束性マーカーの翻訳テクストにおける明示化が特に言語学習者や経験の浅い翻訳者で見られる事実を指摘している。簡素化については、語彙、統語、スタイルの 3 種類の考察がある(Blum-Kulka&Levenston, 1983; Vanderauwera, 1985)。正常化／平準化については、目標言語の読者の容認するテクストの慣習に準じて、句読点、語彙、スタイル、テクスト構成等がシフトする考察や(Vanderauwera, 1985)、通訳研究では英語からヘブライ語の平準化を考察した研究がある(Shlesinger, 1991)。

一方で、上記の区分自体は実際には曖昧で、テクストのどの要素をどの分類にするかは難しく、コーパス結果から単純に割り出せるものではない(Baker, 1996)。以下に例を挙げる。

(1) I do not feel shocked, having expected him to take the easiest way out.
(2) I do not feel shocked, because I expect/expect him to take the easiest way out.

(ibid. p. 180)

翻訳では、オリジナル ST よりも、(2)のように定形節の方が非定形節よりも多く観察されるが、これを明示化とするか、簡素化とするかの問題がある。定形節は、文章の処理能力的には簡素化している一方で、意味的には明示化でもあるからだ。

また翻訳の普遍的特性としての曖昧性は Pym(2008)も指摘するように、明示化は、Blum-Kulka によると文法上の機能語が付加されるので（上記では *because*）、実際に文章が長くなる傾向が見られ、TTR も下がる。結果として、読者にとって容易に読める文章になるのだが、これは簡素化の一種ではないのだろうか、という疑問が生じる。正常化の分類に句読点の省略も含まれているが、これも簡素化と捉えられる。同様に、簡素化が起きると文が短縮するが、明示化が起こると曖昧性を解消しようとして、上の例に見られるよう

に *because* が付加されるなどして、文章は長くなってしまう。しかし、語彙密度の観点からは、これは減少傾向になることが予想され、TTR も下がる。つまり、これら区分は互いに重複する部分が多く、いうなれば、ある同じ現象を細分化したために、各定義が矛盾していると考えられるのである。

つまり Baker による普遍的特性の類型は、先の Toury の法則でいう標準化進行の法則にしか言及しておらず、干渉の法則については何も示していないことになる(Pym, 2008)。確かに上で見たように、明示化・簡素化は、正常化(つまり標準化)の細分化だといえる。そもそも、この類型が言語ペアに関係なく考察されうる「普遍的(universal)」な特徴であるという点においても議論の余地があるのだが、それは差し引いても、標準化進行の法則という一面だけを記述する区分だけでは DTS としては不十分であり、干渉の法則の記述ができないのである。Baker の区分では、先に挙げた「保守化」の特徴を記述することはできるとしても、「翻訳調」の特徴を示すことが出来ないことになる。翻訳が ST の干渉を受けて「翻訳調」となるのも、重要な translationese の特徴であろう。先述した例で言えば、日本の明治期の翻訳は ST からの干渉によって TT に伝えられた表現が日本語の文体へも影響を及ぼしたのは事実であるし(水野, 2007)、句読点のパターン等も、翻訳によってそれが国語に持ち込まれることで今の規則に至るとも言われる(山岡, 2000)。また、最近では翻訳メモリの利用により、TT が ST の干渉を受けることも少しずつ明らかになっている (Bowker, 2005)。

Baker の立場はこれとは逆で、普遍的特性とは「オリジナル言葉でなく翻訳テクストに典型的に起こり、特定の言語システムからの干渉の結果ではないような特徴」(1993: 242)としている。これは House(1997)のいう covert translation(自然な目標言語のように聞こえるような翻訳)にも見られるもので(Balaskó, 2008, p. 61)、overt translation(直訳調の翻訳)の特徴とは区別される。つまり、Baker は普遍的特性を、意図的に Toury の干渉とは別のものと考えているのだ。すなわち、translationese の特徴は、「標準化≒普遍的特性」と「干渉」との両方の影響を受けており、その記述に当たっても両方の側面を考慮する必要がある。

まとめると、translationese の特徴は 2 つの要素と関連している。2 つの要素とは、1)干渉の法則、2) 普遍的特性（標準化進行の法則）である。1）によって、典型的な目標言語の使用とは異なるふるまいをする目標言語がもたらされ、2)は明示化、単純化、平常化などによる(Balaskó, 2008, p. 61)。前者 1)の要素は干渉の法則と関連しており、ST の言語要素が TT に影響した結果として現れる特徴であり、こちらを 2)の普遍的特性の類型区分で記述することは出来ない。一方、2)の普遍的特性は「標準化進行の法則」の特徴を包含するものであり、翻訳者によって解釈や操作が施された結果生じる特徴だということができる。

Balaskó の議論はさらに、corpus-driven 型と corpus-base 型の調査方法にも言及している。「干渉」を記述するには corpus-driven 型の手法を用いて、TT の特徴をボトムアップ的に積み上げることにより、TT に見られる ST パターンの現れ方と分布に記述の主眼を置いている。これに対して、corpus-base 型により導き出される結果では、2)の普遍的特性の類型を立証するようなトップダウン的説明になるため、こちらはむしろ副次的なものとされる。つまり、コーパスを用いて調査すべき translationese の特徴は 1)の典型的な目標言語のふる

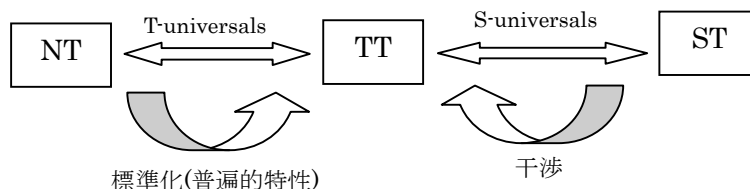
まいとの違いであり、（ST からの）干渉の記述が新たな翻訳の特徴を発見できる可能性を重視しているのである。

5. S-universals と T-universals

干渉の法則や普遍的特性は、翻訳における ST とオリジナルの TT との相違もしくは類似への関心を示す概念であるが、Chesterman(2004)は、これを S-universals と T-universals とに整理した。S-universals(S は source の意)は、翻訳テクストと ST との違いで、翻訳者が起点テクストを処理する特徴である。T-universals(T は target の意)は、翻訳テクストと翻訳でないオリジナルの目標テクストとの相違になる。Chesterman は用語についても整備し、TT を翻訳テクスト(translated text)、翻訳でない目標言語テクストを NT(non-translated text)と呼んだ(ibid)。これにより、S-universals は ST と TT の差、T-universals は TT と NT との違いということになる。

先述した普遍的特性や Toury の法則の議論を、この図式で再考するとまた新たな示唆が得られる。Chesterman は Toury の 2 つの法則を潜在的 S-universals に分類している(2004, p. 40)。同様に、Blum-Kulka の明示化仮説(1986)も同じカテゴリーに置いている。Blum-Kulka の論文の内容は、ST と TT との比較であり、TT と NT を比べたものではないので S-universals として分類されるのは分かるが、Toury の法則の方はどうだろうか。実際、標準化も干渉の法則も ST との関係から TT を考えている。標準化は、ST ではなく NT への正常化であるし、干渉はまさに、ST から TT への影響である。その結果を受けた TT を ST と比較すれば、当然その違いが S-universals として考察される。しかし疑問は残る。2 つの法則の作用した翻訳物 TT を NT と比べたとき、例えば、標準化が過剰に作用すれば TT が NT の特徴を過度に模倣して目標言語のノームから逸脱するケースもあるだろうし（この意味では、目標言語システムからの「干渉」とも言える[1]）、また、ST から干渉を受けた TT も、T-universal を示しうるはずである。

これ以上の議論は本稿の趣旨から逸れるので詳述は避けるが、ここで取り上げた ST、TT、NT の各テクストの関係は、translationese の特徴がもたらされる（テクスト間の）影響の方向を示す上で便利である。これまでの議論をまとめたそれぞれの関係を以下に図示する。

図 1　標準化と干渉が作用するテクスト間の関係

上図より、translationese（=TT）は、ST と NT との相違（および類似）であるのがわかる。また TT が受ける各テクストからの影響も示した通りだ。ST からは干渉を受け、NT からは標準化もしくは普遍的特性の明示化、簡素化、正常化／保守化の影響を受けるといえる

だろう。TT が ST から干渉しか受けていないとしても、S-universals と T-universals は考察されうる。同様に、NT からの標準化の影響しか受けていないとしても同じである。このように、TT に含まれる特徴の起因を ST と NT との関係から図のように理解することができる。

6. 翻訳の普遍的特性と干渉の起因

そもそも翻訳の普遍的特性や干渉は、何故発生するのだろうか。翻訳の普遍的特性は、翻訳プロセスの過程でもたらされると考えられているが、訳文を操作する翻訳者の社会的コンテクストや規範、認知レベルでの分析が必要で一概には言うことはできない。先の DTS では多元的システムとの関係で社会マクロ的説明可能性が示された。また翻訳をコミュニケーション行動として捉える立場から、翻訳者が読者にメッセージを伝達する仲介者としての社会文化的役割の認識と関連付けた説明も試みられる(Klaudy, 1996 参照)。目標言語を重視する機能主義的立場からは、翻訳の目的、いわゆる Skopos に準じ、またそれが許す限り、翻訳者は明確かつ矛盾のないライティングを達成するために、ぼんやりとした ST のオリジナルのテクストに明かりを灯すことが翻訳に求められている (Chesterman, 2004, p. 45)。これは、明示化の部分的説明となるが、これ以外にも、関連性理論の観点から説明できるかもしれない(Gutt, 2000)。文脈効果と処理労力を ST と TT で等しくするという観点から、TT の処理労力が ST より余計にかかるような訳し方はよくないとされ、ST と同じような文脈効果を持つ TT を書くために、また受け手の処理労力を最小化するために、プロ翻訳者が TT の受け手の認知環境を想定し、その環境の中でどのようにテクストを解釈するか考えることが必要となる。いずれにしても、翻訳の普遍的特性がもたらされる理由の説明には、認知的、社会マクロ的視座からの分析が必要であろう。

では、干渉の方はどうだろうか。ST の言語的要素が TT に持ち込まれる理由は、明示化や簡素化のように翻訳者の認知的理解や解釈、Skopos を意識した操作などが伴わない分、もう少し明解である。翻訳が他の言語との接触を起点としている以上、ST の構造や語彙順序に影響を受けるのはある意味、不可避的である。Balaskó(2008)の主張の通り、TT と NT のパラレルコーパスから分かるのは、ST から干渉をうけた「パターン」が TT に見られるという事である。

Balaskó は科学に関する文書の英語のオリジナルとハンガリー語の TT と NT を比較し、figure と ábra の出現結果を分析した(ibid)。語彙・文法レベルにおいて、TT は ST の「パターン」を使い、目標言語の規則を破らないので、受け入れるのだが、その使用法が「不自然」であるという(ibid, p. 60)。「不自然」とは文法的に正しいのも関わらず、NT と比較すると出現頻度や使用法が典型的ではないという事だ。また、テクストのレベルでも、figure という語が、文章の論証(argument)もしくはテキストダイナミクスの一部に現れるのに対して NT では論証を強調しつつ文章を終結する使われ方をする点で異なる(ibid, p. 69)。このように TT には NT と異なる特徴が考察され、この特徴が ST との干渉であることが実証データ結果より確認できる。つまり、普遍的特性の明示化や簡素化の原因分析よりも、干渉の現象の方が、実証データ結果から直接原因を導きやすいと言える。

7. TT から TT への影響 ― 翻訳メモリの使用時

上記では、干渉による translationese の特徴が、ST から影響を受けることを見てきたが、翻訳メモリを使用した翻訳では、ST からだけでなく TT からも干渉が受ける。これは翻訳メモリを使用しない翻訳にも程度の差はあれ、当てはまる可能性がある。

翻訳メモリは ST と TT を対にしたデータベースで、新規翻訳の際に、新たな ST と類似したデータベース内の ST-TT ペア(通常は文章単位)を自動的に翻訳者に表示してくれるツールである（詳細は山田 2007 等参照）。翻訳者は表示された既存 TT を参照しながら、翻訳を進めることができる。また用語集ツールも翻訳メモリに同期して動作している場合が多く、翻訳者は、文章単位での ST-TT 対応関係だけでなく、単語やフレーズの単位の対応を検索・認識することになる。翻訳メモリを使って作業する翻訳者にとって、この「ST-TT ペア」は様々なチャンク単位において、半強制的な「等価」となる。下図は、翻訳メモリを単語とフレーズのチャンクレベルでの「対応ペア」を検索する翻訳者の作業プロセスを示したものである。既存文と新規文のマッチ率が低いにも関わらず、翻訳者がこの情報を詳細レベルでそれぞれのチャンクの対応関係を意識しうる操作を図式化した。

図 2　単語レベルでのマッチ検索

既存 ST	You must click on the button if you want to select the character.
新規 ST	When you are finished selecting the character, click the OK button.
既存訳	文字を選択したい場合は、ボタンをクリックします。
新規訳	文字を選択したら、OK ボタンをクリックします。

図 3　フレーズ・レベルでのマッチ検索

既存 ST	First, check for disk space on the drive that contains the Temp folder
既存訳	まず、Temp フォルダーが含まれるドライブの空き容量を確認します。
新規 ST	Close other programs, check for disk space on the drive you are saving to, and then save again.
新規訳	ほかのプログラムを閉じて、保存先のフォルダーが含まれるドライブの空き容量を確認し、再度保存します。

(Bowker, 2002: 104　和訳は引用者による)

図 2 から分かるのは、既存 ST の you、click、select、button、character が新規翻訳の ST

文節にも現れ、これらの対訳が、ゼロ翻訳(you)、クリック、選択、ボタン、文字、のように既訳 TT に対応しているということである。これ以外にも、和訳のスタイル情報として、「～します」調が使用されていること。また、このセグメントだけで判断が可能できないかもしれないが、if 節なら「～場合」、when 節なら「～したら」とすると翻訳者は判断するかもしれない。図 3 も同様に、下線部の「check for disk space on the drive」のフレーズが「ドライブの空き容量を確認」として対応していることを翻訳者が認識しているのが分かる。

上記は翻訳メモリを使用した場合の一般的な翻訳プロセス操作／方略となるので、翻訳者は、まず新規 ST が既存の文節と一致していないかどうかをデータベース内で検索する。文章単位でヒットが見つからない場合は、それよりも小さな単位でのマッチを検索し(図 3)、最終的に単語レベルでの一致を探す(図 2)。この方略は現在主流の自動翻訳機に採用されている Example-base machine translation(EBMT)のプロセスと同じで、翻訳メモリのような MAHT(Machine-aided human translation)[2] では翻訳者が ST-TT ペアを各レベルで比較操作する(Bowker, 2004, Quah, 2006)。今後、翻訳メモリの技術が進歩すれば、この操作も機械側で行なえる可能性があるが、ここで留意しておきたいのは、ST-TT の各レベルにおける（等価）対応関係が翻訳者とっては非常に重要であるということだ。対応関係が見つかれば、それが再利用できることを意味し、再利用されるということは、既存 TT が新規 TT に、そのままの形で持ち込まれることを意味する。

この操作、つまり「再利用」は、干渉の法則の positive transfer と読み替えることができる。Toury の干渉は ST から TT への転移を想定した法則であるが、上記のケースでは TT→TT の転移ということになる。翻訳者はチャンクレベルでの ST-TT 対応を検索するが、訳文に転移するのは既存 TT だけである。既存 ST は、対応箇所を探すためのマーカーにしかならない。つまり、新規 TT は、ST からほとんど干渉を受けないことになる。登録されている既存 TT が問題なく新規 TT として再利用できれば、原理としては ST からの positive transfer と同じということができるだろう。

8. TT からの negative transfer

これに対して、TT からの negative transfer も考えられる。翻訳メモリの仕組み上、当然、既存の訳文にどのような TT が保存されているかが鍵となる。既存 TT に誤訳が登録されていれば、新規 TT に誤訳が伝播してしまう可能性がある [3]。誤訳でないとしても、質の良くない訳文が登録されていて翻訳者がそのチャンクを再利用してしまえば、訳文の質が低下してしまう。既存 TT チャンクを再利用しても、そのままでは翻訳として受容されない状況、つまり negative transfer ということになる。

Bowker(2005)は、翻訳メモリを使用した翻訳の質と生産性を見るために小実験を行い、作業時間的に制約された環境では質の悪い既存訳が著しい頻度で新規 TT に再利用されてしまう実態を検証した。翻訳メモリを使用したグループと使用しないグループとでは、生産性の点でメモリを使ったグループに優位性が見られた。しかし、翻訳の質に関しては、翻訳メモリを使用した場合に特有に見られる「sentence salad 現象」が考察された。これは、

異なるテクストタイプやジャンルの文章がメモリ内に登録されている場合に起こる現象で、翻訳テクストの一貫性(coherence)が著しく失われる症状である。文体や分野の全く違う文章をツギハギ文として再利用してしまうという極端な現象である。Bowker は、具体例を挙げていないので、例を挙げる。同種のテクストタイプであってもクライアントによってスタイルや用語の扱いが異なる場合がある。例えば IT 系の取扱い説明書であっても、「Reboot the PC」という ST の和訳は、エンド・ユーザ志向であれば「コンピュータを再起動してください」なるかもしれないが、専門家向けでは「PC をリブートせよ」と訳されているかもしれない。もしこれらが同じメモリ内に混在していて、マッチするセグメントやチャンク単位で新規 TT に再利用されてしまうと、訳文に不統一な文章が混在してしまう。先述した ST-TT の対応関係を重視する翻訳メモリでの作業環境では、とくに作業時間が制約された環境下だと、翻訳者は既存訳を見直す余裕がないというのが要因の一つとも考えられるが、明らかに登録されている既存 TT の質の問題と関係している。

もし原文の ST 側に一貫性の問題や誤りがあるなら、翻訳では、正常化が起きて、翻訳者は訳出の際に TT に一貫性を保持したり、完全な文章に修正したりして翻訳することがある(Vanderauwera, 1985)。また同時通訳の実験でも明らかなように、原発言(ST)に一貫性が欠如していても、訳出された TT に一貫性が保持されることも分かっている(水野,1999: 39)。このように、ST 側に誤植があったり一貫性が欠如していたりする場合とは異なり、既存 TT に問題があるケースは、翻訳メモリを使用した特有の現象といえる。Sentence salad 現象は、そのままでは再利用できないような既存 TT が転移するという意味で negative transfer に分類することができるだろう。

この品質向上のためには、データベース内に登録しておく既存翻訳の品質の見直しが重要である。データベースが整備できないのであれば、翻訳メモリの取り扱い方を変えたりすることで（例えば、参考用としてのみの利用とする)、ある程度改善が望めるかもしれないが、この解決方法は翻訳の社会的側面と関係する問題であり、今後はこちらの研究も必要になってくる。しかし Pym(2008)の指摘するように、現状の実務翻訳の状況において、限られた時間ではメモリに表示された既存訳を見直す余裕もなく、むしろメモリに従った翻訳が好まれる現状では、Bowker の主張どおりメモリ側に登録する訳文を検討することが現実的であるだろう。この意味でも、TT からの干渉は、今後の更なる調査が求められる事象なのである。

9. 干渉と再利用の効率性（翻訳メモリの諸問題の再考）

翻訳メモリを使用した翻訳の再利用を、既存 TT から新規 TT への「干渉」として positive/negative transfer されるという観点から見てきたが、いずれのケースも、TT の対応チャンクがそのまま受け継がれる事象であった。しかし、既存 TT チャンクがそのまま再利用できない場合は、翻訳者の操作が加わるので、単なる transfer とは違う制約が作用する。「再利用効率」という別の次元の要因が絡み合ってくるのだ。以下では、翻訳メモリ特有の問題点を、これまでの議論を元に具体例を用いて考察する[4]。

例 1　【既存 TT】

Creating a list of objects to scan

オブジェクトスキャンリストの作成

【新規 TT】

Changing the type of objects to scan

オブジェクトスキャンタイプの変更

例 1 は、新規 TT が既存 TT の形式がそのまま再利用されて訳出された例である。「objects to scan」が「オブジェクトスキャン」に対応し、そのチャンクが新規 TT でもそのまま流用されている。訳出されたフレーズにカタカナが羅列されているので、これを嫌って「スキャン対象オブジェクトタイプの変更」と訳した翻訳者もいた。既存 TT 含めて、どの文が模範的な訳出なのかここでは明言しないが、メモリに登録されている既存 TT が新規 TT に影響する様子が分かる。この事例は、既存 TT からの干渉(negative transfer)とも考えられるが、既存 TT への正常化とも捉えることもできるだろう。これを踏まえて次の例をみてみよう。

例 2

【既存 TT】

Creating a list of objects to scan

ウィルススキャン対象オブジェクトリストの作成

【新規 TT】

Changing the type of objects to scan

ウィルススキャン対象オブジェクトタイプの変更

例 2 は、例 1 と同じ ST だが、TT が異なる。例 2 の既存 TT には「ウィルス」が付加されているのに注意されたい。パソコンのウィルスソフトの取扱説明書であるという背景から、既存 TT では「スキャン」という言葉をより厳密に表現したいという配慮がされ「ウィルススキャン」というように明示化（標準化）が起きている。これが新規 TT に転移する形で継承されている。例 1 と 2 は形式上同じ事象であるが、例 2 では明示化された語がそのまま引き継がれているという点が興味深い。しかし、次に挙げる例では同様の現象は起きない。

例 3

【既存 TT】

To view detailed information, click [Operation report].

コンポーネントの詳細情報を表示するには、［レポートを開く］をクリックします。

【新規 TT】

When the scan is running, detailed information is written to a report.

スキャン実行時には、詳細情報がレポートに記録されます。

例 3 の既存 TT では、「detailed information」の訳が「コンポーネントの詳細情報」となり「コンポーネント」を付加(明示化)している。これは、例 2 と似ている。既存 TT が示す状況依存コンテクスト（ソフトウェア上の特定画面）においては、言及されている内容を「コンポーネントの詳細情報」と特定することが出来たのであろう。おそらくエンド・ユーザを配慮した明示的な言い方を意図し、編集者によって後から修正・追加された記述と思われる。しかし、同様の明示化は新規 TT に見られない（「コンポーネント」とは限定できない)。これは訳文としては間違いではないが、エンド・ユーザを配慮した言い方になっていない。無論、この文脈で「コンポーネントの詳細情報」がそのまま引き継がれてしまうと誤訳になる可能性がある。翻訳者もそれには気付いており、明示化された既存 TT のチャンクをそのまま再利用することはしなかった。翻訳者が新規 ST の状況依存コンテクストをソフトウェア上で実際に確認できなかった（工数的余裕がなかった）ので、むやみに不確定な情報を付加する事を避けたからであろう。しかし、もう一つの理由として翻訳メモリの訳文の「再利用率」を上げたいという訳者の意図とも関係していると考えられる。

先述した通り、翻訳メモリを使った翻訳では ST-TT ペアが重視されるが、その背景には ST-TT の 1 対 1 の対訳が優先されているという状況がある。一つの ST チャンクに複数の訳語を当てると再利用率が下がってしまうからだ。例 2 で見たように、この 1 対 1 対応が保持されていれば、明示化訳も再利用される可能性がある。「ウィルス」の付加は、この製品がウィルス対策ソフトであるということから、全般に渡って適用される事を意味している。しかし例 3 のように特定の状況やコンテクストで生じる明示化の場合は、1 対 1 の訳語として対応せず、その限りではない。Pym はこの 1 対 1 対応を「人工的等価(artificial equivalence)」と呼んだが(2004, p. 63)、まさに生産性を重視した翻訳メモリ特有の現象だといえる。

現状の技術では、ST-TT ペアは最大でも 1 文単位のセグメントまでしか扱えない。そのため、談話としてのテクスト性の観点からも、現状の翻訳メモリの品質問題は指摘されている(Bowker, 2002)。上記で見たような再利用性を高める現象は peephole translation と言われ(Heyn, 1998, p. 135)、英訳では前方照応や後方照応指示(it や this)を用いないで翻訳がなされることが考察されている。その結果、テクストの結束性(cohesion)が弱まった訳出がされてしまうことが報告されている(Bowker, 2002, p. 117)。上記の例は、結束性の問題を示す事例ではなかったが、再利用性向上に付随した事象である。また、peephole translation は、翻訳メモリの技術面が引き起こす問題の一つで、再利用性と関係なく起きることもある。以下に、その結束性が弱まる例を挙げておく。

例 4

A scan of the selected application will then begin, and the scan window be shown. When you

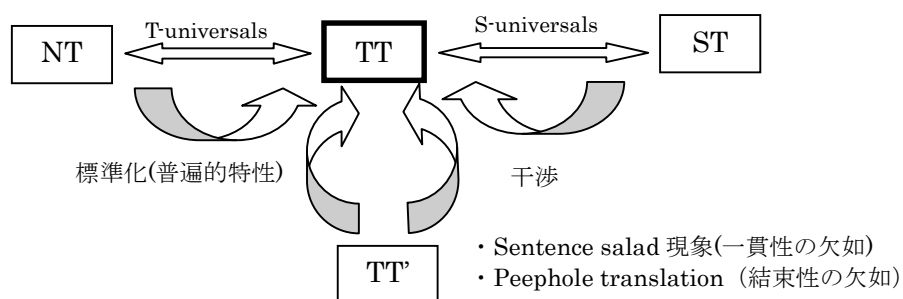
press the [Close] button, the window will close, although the scan will continue.

選択したソフトウェアのスキャンが始まると、ウィルススキャンウィンドウが表示されます。［閉じる］をクリックしてウィルススキャンウィンドウを閉じることができます。ウィルススキャンウィンドウを閉じても処理は終了されません。

例 4 では下線部のセグメントのみが新規翻訳の対象になっており、翻訳者が実際に手を加えるのは下線の文章のみであった。下線の引かれていない文は翻訳不要(100%マッチ)であり、「A scan of the…」の文章を翻訳した後、翻訳メモリは次の Fuzzy マッチセグメントまで自動的に送ってしまう[5]。このように改定箇所のみ翻訳を必要とする「差分翻訳」という作業は、翻訳メモリが最も効率的に用いられる状況なので、実務において頻繁に起こりうるケースである。ここでは翻訳の細部へは言及しないが、例 4 で翻訳者が翻訳の必要なセグメントにしか注意を払わない peephole translation がされているのが分かる。ST にくらべ TT の結束性が弱まっている。ツールによってはパラグラフ単位でセグメントを調整できることもあるが(Esselink, 2000)、再利用効率は低下するので今後の技術改善が望まれる。いずれも、現状では翻訳メモリの基本的問題であるのでここに記した。

10. まとめ

以上見てきたように、翻訳メモリでは既存 TT から新規 TT が干渉を受ける特有のルートが存在することが分わかる。登録されている既存 TT 次第では、negative transfer により sentence salad 現象がもたらされて、テクストの一貫性が欠如することも見てきた。またチャンクレベルで ST-TT の 1 対 1 対応がされていれば、TT→TT で翻訳の普遍的特性も転移される実例をみた（明示化)。しかし、再利用効率が重要視される翻訳メモリの原理的制約と、最大で文章単位でしか再利用できない規制とから、peephole translation が起きて、テクストの結束性が欠如することも分かった。これらの要因を考慮して translationese に影響を与えるテクストの関係を修正し以下に図示し、本稿のまとめとする。

図 4　標準化と干渉が作用するテクスト間の関係（修正）

今後は、上記で新たに加えたられた既存 TT と新規 TT 比較研究をコーパス調査で行なうことで、従来のパラレルコーパス研究では見られない特徴を記述できる可能性がある。本

稿では、翻訳メモリを中心的に扱ったが、メモリを使わない翻訳の場合でも、辞書などで提供される定訳、専門分野の用語集、対訳集などは、ある意味、翻訳メモリに似た現象を引き起こす可能性がある。この意味でも、TT→TT の影響や実証データ研究は、今後必要であろう。

著者紹介：山田 優 (YAMADA Masaru) ウエストバージニア大学 言語学科修士課程修了。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士課程後期課程在籍。ローカリゼーション業務に従事。連絡先 ：yamada@apple-eye.com

---

【註】

1. Munday (2008), p. 182 参照。
2. MAHT は、翻訳支援ツールを使用した人による翻訳を示す。翻訳メモリを使った作業はこれに該当する。自動翻訳機を使用して人が編集や修正をする翻訳作業は、HAMT (Human-aided machine translation)と呼ばれ、主作業を機械翻訳行なうため、前者とは区別される。今後、翻訳メモリで EBMT の作業を行えるようになれば、この区別はさらに曖昧になる。
3. Bowker (2005)では、意図的に誤訳やミスを混ぜたデータベースを一つのグループに使わせて、翻訳結果を考察した。特に、翻訳メモリのマッチ率が高いセグメントでは、誤訳がそのまま再利用された。
4. ここで用いる事例は、実際に翻訳メモリを使用して複数の翻訳者が翻訳した実務環境での結果に、著者が修正を加えたものである。現象を質的に説明するための事例であり、今後は翻訳結果をコーパスとして用いた量的調査が必要である。
5. 厳密にはどのように作業をするかによるので、必ずしも翻訳メモリが自動的に No マッチもしくは fuzzy マッチまでセグメントを送ってしまうとは限らない。ただし、翻訳者は自分が翻訳を行なっているセグメントに集中しすぎて、文脈全体が見づらくなるのは事実である。これは、翻訳メモリの技術的制約と関係している。

【参考文献】

Baker, M. (1993). Corpus linguistics and translation studies: Implications and applications. In M. Baker et al. (Eds.), *Text and technology: In honor of John Sinclair*. Amsterdam: John Benjamins. 223-250.

Baker, M. (1996). Corpus-based translation studies: The challenges that lie ahead. In J. C. Sager & H. L. Somers (Eds.), *Terminology, LSP, and translation : studies in language engineering in honour of Juan C. Sager*. Amsterdam: John Benjamins. 175-186.

Baker, M. (1998). Norms. In M. Baker (Ed), *Routledge encyclopedia of translation studies*. London/ New York: Routledge. 163-165.

Baker, M. (2007). Patterns of idiomaticity in translated vs. non-translated text. *Belgian journal of linguistics: the study of language and translation* , Vol. 21: 11-21.

Balaskó, M. (2008). What does the figure show?: Patterns of transtionese in a Hungarian comparable corpus. *trans-kom* 1[1]: 58-73. [Online] http://www.trans-kom.eu/bd01nr01/trans-kom_01-05_Balasko_What_Does_the_Figure_Show.20080707.pdf (2008 年 7 月 28 日)

Blum-Kulka, S. (1986). Shifts of cohesion and coherence in translation. In J. House & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlingual and intercultural communication*. Tübingen: Gunter Narr Verlag. 17-35.

Blum-Kulka, S.& Levenston E. (1983). Universals of Lexical Simplification. In C. Faerch & G. Casper (Eds.), *Strategies in Inter-language Communication*. London/ New York: Longman. 119-139.

Bowker, L (2002). *Computer-aided translation technology: A practical introduction*. Ottawa: University of Ottawa Press.

Bowker, L. (2005). Productivity vs Quality: A pilot study on the impact of translation memory systems. *Localisation Focus* 4(1): 13-20.

Chesterman, A. (2004). Beyond the particular In Mauranen, A. & P. Kujamäki (Eds.), Translation universals : do they exist. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. 33-49.

Esselink, B. (2000). *A practical guide to localization*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Even-Zohar, I. (1978/1990). The position of translated literature within the literary polysystem. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader*. London/ New York: Routledge. 192-197.

Frawley, W. (1984). Prolegomenon to a theory of translation. In W. Frawley (Ed.), *Translation: Literary, linguistics, and philosophical perspectives*. London/ Toronto: Associated University Press. 159-175.

Gutt, E. (2000). *Translation and relevance: Cognition and context*. Manchester/ Boston: St. Jerome.

House, J. (1997). Translation Quality Assessment: A Model Revisited. Tübigen: Narr.

Heyn, M. (1998). Translation memories: Insights and prospects. In L. Bowker, M. Cronin, D. Kenny, & J. Pearson (Eds.), *Unity in diversity? Current trends in translation studies*. Manchester: St. Jerome. 123-36.

Klaudy, K. (1996). Back-translation as a tool for detecting explicitation strategies in translation. In K. Klaudy et al. (Eds.), *Translation studies in Hungary*. Budapest: Scholastica. 99-114.

Malmkjær, K. (1997). Punctuation in Hans Christian Andersen's Stories and in Their Translations into English. In F. Poyatos (ed.) *Nonverbal Communication and Translation. New Perspectives and Challenges in Literature, Interpretation and the Media.* Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. 151-162.

Muday, J. (2008). *Introducing translation studies*. London: Routledge.

Nida, E. (1964). *Toward a science of translating*, Leiden: E.J. Brill.

Pym, A. (2004). The moving text: Localization, translation, and distribution. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Pym, A. (2008). On Toury’s laws of how translators translate. In A. Pym, M. Shlesinger, et al. (Eds),

Beyond descriptive translation studies. Amsterdam: John Benjamins. 317-328.

Quah, C. (2006). *Translation and technology*. New York: Palgrave Macmillan.

Shlesinger, M. (1991). Interpreter latitude vs. due process: simultaneous and consecutive interpretation in multilingual trials. In S. Tirkkonen-Condit (ed.), *Empirical research in translation and intercultural studies*. Tübingen: Gunter Narr. 147-155.

Toury, G (1980). *In search of a theory of translation*. Tel Aviv: The Porter Institute.

Toury, G (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Toury, G. (2004). Probablistic explanations in translation studies: Welcome as they are, would they qualify as universals? In Mauranen, A. & P. Kujamäki (Eds.), *Translation universals : do they exist*. Amsterdam /Philadelphia: John Benjamins. 15-31.

Vanderauwera, R. (1985). *Dutch novels translated into English: The transformation of a 'minority' literature*. Amsterdam: Rodopi.

Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London: Routledge.

水野的 (1999) Shifts of cohesion and coherence in simultaneous interpretation from English into Japanese.『通訳理論研究』16 (Vol. 8, No. 2): 31-41.

水野的 (2007)「近代日本の文学的多元システムと翻訳の位相―直訳の系譜」『翻訳研究への招待』日本通訳学会　翻訳理論研究会分科会: 3-43.

中村優子 (2007)「広告における自然言説の英日翻訳分析：観光際を事例に」『通訳研究への招待』日本通訳学会　翻訳理論研究会分科会: 109-121.

柳父章. (2004) 『近代日本語の思想:翻訳文体成立事情』 法政大学出版

山岡洋一 (2000)「翻訳講義:翻訳はなぜ難しいのか」
[Online] http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/ron/bn/naze.html　(2008 年 7 月 15 日)

山田優 (2007)「ローカリゼーションにおける翻訳と翻訳理論研究」『翻訳研究への招待』日本通訳学会　翻訳理論研究会分科会: 57-68.